刀筆書紙石文

七

へ13
3573
7

門へ13
號3573
巻7

早稲田大學図書館
昭34.6.3
藏書

双蝶蝶曲輪日記砥石文鶯水箴語巻之六

江隱　曲亭主人筆削
洛客　樂亭琴魚原稿

つたや

第十套　人心の追儺

五十子七郎声高やうかゝ云と呼ぶ程よ中門の外遣ようけめると忘て獄卒ホ一両人梏拲を被らうる偽二郎旦藏を牽立て簀子の下よ推居うり。

藤綱つらく〳〵こゝ名草劇齋うけめれ蓮華院の法師ホ来れとみづからその名を呼ら宛バ各唯々と応して共侶は額つ寄り當下藤綱声を激しゝそれ劇齋汝が墓を發れとふ彼妾碟とやゝんハ親同胞もなれの狀何ゆを保ゝそいつの

比より使やる又その妻い病臥せ〜こと幾日なり〜何の症出て身まのりる巨細はいへ
いりにぞと問ふそ劇齋頭を擡さ〜件の礫ハ側室とあらせど家のあるを任せ〜ば
正妻は異あ〜だよりて平地保人いはい但杣木挽坊ある異杜とあ老婆のを迺礫が
親族共。つは里ぐ〜なるあ〜そを娶り〜ハ去歳の冬十月はゆひ〜かく〜く今茲
六月下旬六波羅殿の仰はありそ小人筑紫へ赴かつ九月の十三日に帰京ぞ〜。
この比より彼女子い言語応荅常か〜ぞ乱心うと思へバさあ〜日もあり〜ハ小人が
長地旅形を待ふびより氣の凝りそ引出せ〜病症あ〜んと共人ハ家方の
配剤そ服薬を勧めどもその性湯液をいく嫌ゆく果敢く〜なるも用ひぞ。
とく〜ふる程は十月某日は一夕更闌人定まそ渠ハ臥房を潛出ん庭ある

井は陥りて果敢なく〜と惜しゆは渠が逢愛の件々を抱く斂め葬を
少地おハ世の費を惜めざる越度はそといはる比廳の坊叱りを被て泣とく
後悔つるまりぬとも人ハ藤綱うちゆ〜て劇齋目今おうせ〜如くあ〜ハ。
礫が入水ハ横死あ〜ぞ何ぞ廳の鑒定を請ぜ〜く葬ぞると処ならま
くもあ〜ぞ怯ぞ御掟ぞハ〜へども件の女子が病症ハ内外の人と食よく知りもて
その里ぐ〜ふる異杜も異殘なくゆ〜ハ釋氏の律は任せ〜のこ〜ぞ〜ん
ゆそ燈人多〜と陳ぞれハ藤綱かさひて〜ぞ〜ハその燈人をねて〜ぞ〜
誰そぞと再び問れてさハ用意をせざり〜ぞ燈人とそハねて来〜ぞ只
小人が従者ある登八といふものハ年来の塾生ぞ彼ものもく知れのとゆが藤綱

頷かくその蜜八ハ何処よりか門前より間ハ藤綱ハ五子七郎を見
えうと疾く蜜八を召よせよとうくとのそゞろ五子七郎ころ云云と
呼立れば外邊ゐる歩卒ホ下知ハ隨ひ蜜八をゐく劇斎が左りのかさ推居う
藤綱これを信とんく蜜八とハ汝よかれ今汝ハ何ゆえ劇斎が側室礫ゝ死
せしハ何ホの病症ありるぞと問れて蜜八ころを申ぞ否そのすへとゞろりよ
答難るを劇斎ハあゞく霧ハ[illegible]只管ハ目を注れども蜜八ハいぞう悟る
べく遂巡して頭を掻く迷惑既ハ顔れし氣色ハ七郎声をあり立て覓笠
つゝあれいるゝと遣られて蜜八ハいゝ難渋の今さら尋思ハ違あくぞ
あげいん主の側室ハ一日も病煩やるるゝ故てをゝね庭の井ハ身を投く

ゆゝと回答をとれば劇斎ハ序ろとゝ見ぞ若の胸を壓ぎ如く思
嘆息をゝうる藤綱ハまもてと点頭をゝうも笑ひ劇斎彼ぞゝる狡誠ハ汝
請ゝより蜜八ハ訊ぶ礫ハ絶く一日も病煩やるるゝとハ汝ハ偽り
ゝゝべくのゝ大贈不敵の癖者なれ明々地ハゝ[illegible]ぞハ目ハ抜んせと働る
扇を勝ハ推立て敦圍ゐく罵懲ゝ劇斎ハ怒るゝをゝ[illegible]と後悔
して蜜八を恨るゝをゝび頭を撞ぞいんや又蜜八ハ駭怕れて身を縮し白雨の
霹靂ハ頭を擊るゝ心地せり藤綱氣色を柔げくゝ偽二郎汝ハ既ハ
首伏て彼墓を發ぞとゝ旦藏ハ首伏せぞこれ彼共ハ分明る贓物
有ぞゝゝ所ぞかゝ中ハ食ゐ[illegible]外ハ盗る物ハゝゝゝ向れて

偽二郎竊よ欺びさゝい曩わハ御勘問の苛責より杖の苦痛よ堪ずれべきく
死ざめと思ひく云云とまうせーうども実ハ彼墓を発かく盗せーうのハ行李
より出し贓物ハ恨あるめく所為歟つめく覚期つまうぐもうを況外よ
又何をう盗ゝ必死と必バ藤綱令笑ひ否彼墓ハ発ぎとも外よ盗ー拘
あるんを又後よ穿鑿せん旦藏ハ又寃屈を叫べどこれも證拠の鏡あり
かくても脱る路ありやといれて旦藏頭を擡小人藤白よりかへるさよ途ハ
主の金を奪れ旦蓮華院よ起居く寺内よ遣るを拾ひハ寔よあや死
越度なれども彼女子が死せーうもの夜ハあやぶひーよ何ぞ墓を発ぐべ死。
杖の苦痛ハ霎時の程のゝ死後の悪名よ比ぶべ忍ぎくやべく遍問せ

とも盗れーうハあり盗ぬ物と詐りとハ知ヤさぶひ入ぐ答る藤綱ゆく
嗟嘆ーう旦藏あるゝ陳じくゝ賊かぶとゆ證ー墓を発ぐるの虚実ハ
旦くまよ議ぎくぐ汝が金を奪ひ賊を捕へどハいつゆく実の虚言をあ
よあんや七郎彼奴と縛めと辞せーく下知せれば兼ると応て内りと下て
蜜ハが利腕楚と挟揚れば駭忙く声あり絞り小人ハ毫ぞうも罪被ぐ死
覚ぬーく人ぐ人とあるひとといはせも果ぐ推伏せく押へく索を掛ぐうける。
當下藤綱案を搔遣り賊奴蜜ハ陳ぜる汝が同類彼処よ在り浅羽十郎
とくくとみづく高く呼立れが阿と応く十郎ハ拗けく縛やる一個の罪人を
追立て外面より進ゝ入り實子の下ハ牽居り厳肅あるくの形勢よ面色

忽地土のごとくなる問れねども事の其故覺れるを為れども解んと
俺の糸九千に身を苦しめける藤綱ならんと劇齋蜜八彼を識
れりもうれしかりしかども落中を彼此とうく偏歴りつきの如此くの町
稍盡ゆくを怪し此生道人一袱の衣を脊負ひ舊衣商人とかたれを售と
しの新なる後方より主従の者ありとうく心の中竊に怕き氣色あり解け
る袱の内を隠せし為体癖者かんとそければ矢庭に浅羽十郎して捕捕
せしその程は商人は駭怕れて忽地に逃失うかりて件の癖者を本廳に牽せ
て繋しく鞫問るより渠その責に堪ずして痒ちもなく首伏せり乘ハ
藥中と呼れる蓮華院の守門いぬる比名草劇齋が家僕なる蜜八に憑れて

云云の墓を發掘又云云は相計ふ。さてその餘なる衣どもハ小人が所徳ホーとく。
ふく秘匿りけるは偽二郎が首伏せ彼謀ゆめく成まり今ハ後安しとなり。
錢竭く身ハ寒うりされバこの衣どもを今宵の酒價はせばとそおらんと
ざうとしてこれ彼墓を發掘し賊ハ定られどもその餘の悪を猶ほん
隱ぶませと責させしが墓をせしその夜さう蜜八は勸められて
豆藏が帰京の途中不意に起く劫しなくも蜜八はそが財布を奪ひ
とりぬよりそこの中三四両を小人は分與へ此と立地に首伏せり。まして劇齋
蜜八ホを捕捕せんとなりがかほ又やの音あれがけの者故一起ども同穴
主は俱せられ招ぜしてまりしハ天網の漏さぬ所是自業自得なり

同類なくのごとくなれバ何ぞその陳ずべきやうもなくまうせと氣色ばつて簀子の下よりも浅羽十郎縛の索引絞り速に首伏せざれバ背を割骨を摧んかくても汝ハなほさらなりと両腕直と締揚れバ蜜八苦痛に堪ずして面を皺め身を悶し。阿那苦し息を絶れなんいかで且く緩べたまひねと泣て勧解て膝打布きて薬中既に搦捕れて露顕のうへハ脱れがたし現彼をのが申せしゝ偽りもなし小人合日ごろ主の愛妾礫にかひを運して口説おとしが渠ハ只強顔のみにて本意をも遂ざりき。あるとき前月某日に真夜中比砍彼女子ハ井に落て身まかりしハ人にあらぬ心の哀きものからもかくありしかくて送葬せしその甲夜に劇斎竊に小人を別室に招きまぜ汝ハいまだしらずや我がうち旅宿の留守の程阿礫ハ偽二郎とふかくも密通月日を

累ねり彼偽二郎ハ汝もしれり蓮華院の食客なるが如此々々の證據あり許すべからず奴原かな然ど外聞を顧て怒をおさへていひ夜まぎれ阿礫に教訓をいたしゝが。渠もさらずに羞らけん忽地非命に終を取れり今さら不便に思へども憎きハ偽二郎なり官府へ訴まうして怨を復さんと欲すれバ暗昧恥を明くべきの所証竊に陥れ官府の手を借りて這奴を殺すべきにまさるなし。その謀ハ箇様々々よ如此々々と耳語示し汝も豫て知るごとく蓮華院の薬中をされ日ごろよりよく押着たらん潜かに小渠と相譚副ゆして為課せよ努人にもらすなと云送しつゝむかを旅さして沙金四五両遣与されたり小人も阿礫にハ久しく思ひをかけたるに。彼偽二郎奴がもちかく密通せしと聞より嫉妬と限りなく胸ハ浅間の獄ならで

燃るごとく憤りよ後の祟をかへりみず。異議なく義引て旅て蓮華院よ走り
出て竊よ藥中を携引出て遠く四條の酒樓よ走出て渠よ飽まで酒を盛り
れも飽まで飲食して彼密計を説示し相摶揉して相共よ酒樓を出れば時
刻もよし。あの子二刻の比よりぬかくて三條まで来る程よ藥中が町家の檐下の
桶よ小便垂るを待て。然て程なく立在ばるが後方より来るものあり。心も
あらで月影よりくと透して見れば。その人ハ別人にして。この年来聟にして同塾の
旦藏が藤白より かへり来るに既よ酔うて人れば這奴学問を鼻よかけて左よ
右ようれを倣る面を又るるけやくさよ脅して遊んと思へば藥中よ長坂一町
ばかり遣り過して前後より走り出て倒さんと胸前を捉るを進て懐ろ

財布を偷て引出して奪取て逃亡ぬ。あとに暗し。藥中共伯よ
蓮華院よ赴く。財布の金を揚て見るよ沙金拾五六両あり。その中四両を藥中に
分與へ又三刻の比墓所よ出て阿磯が柩を堀り出て内よ飲ん衣裳調度を
送るべく引出て扨小鏡と臭紙挿を石畳の邊よ捨或ハ又偽二郎が部屋の
外面孔根の辺よ捨ぬ。藥中と共よ彼部屋の籬笆の破れより窺へば
裡面よハ燈火幽かく障子を半開ける。ほとりよ一箇の行李あるのみ
その時ハ偽二郎ハ。ほとり竊よ身を起して外よ出るやうなれば物蔭よ避隠れて
且く渠を遣過して。何処へ行と跡を目送れば墓所のうしろを起ぬるとて。この隙よ
と長坂あるて藥中と外よ立在せ小人ハ裡面よ入て行李を推ひ孔彼箱

中より出て来るを衣裳撰并をとを底のくさを推納れて故の如くも要人舊の
如く索さへ被て遠く走り出薬中共侶彼寺門なる守屋まで退き餘れる衣へ
薬中より且秘措とを預けて富巷路より八声の鶏ハ数鳴はかくそその
詰豆蓮華院より使僧来て云云と告ぐ小人も劇齋と倶せられく寺より
赴く外面を成る折りく食堂の法とり豆藏ぶ困び果る面色しとかれ居つ只
と訝り當一當て事惜を。あくまでもとらひくべ矢庭より渠を捕へるその懐より
昨夕ぶ捨ぶ小鏡の顕れ出くに意外の幸ひ是如も賊より陷れ奪ひ金の
後肚患ぜと尋思より声とゆり立て罵りつ又引捐りつ客壇へ出ぬ云云と
告ぐ人劇齋も亦さよく意より恢ぬ豆藏れ事虚実をまりつ偽二郎と

同類の儒衣を被せられ又豆藏を助て奪ひ彼金ハ酒の為より用竭しとを
一銭もいぶとをせ罪悪今さらより後悔その甲斐なくよりせもあれ。
皆是主人より分付られて推辞りく氏の所行れば命ぜりハ助けをせ。とりを勸
解れば薬中も亦跪ぶく今蜜ハが首伏より毫ぜりも偽りを小人ハ劇齋と年
来の馴染より比彼人より唯一襲の草履と賣て方銀一片恵れる。
是頃よりて疎りぶ。ぶもの蜜ハよそのくれも相共より彼新墓を造ぶ
ども辛苦銭ハ多くもなりぶ。その本人ハ劇齋と蜜ハとをれかくれ小人が
一命を助けをせ人とのく冀くとハをもあ人ぶ藤綱ハ呵とりを失ひ深
露頭より及ぶ。ぶを儀りくその頭を継れんとをより愚さより再び多言ぶるとのれ。

叱り禁めて傷を入れかれば旦藏は罪ハかゝるべく傳を解せといへ五十子
七郎に旨を獄卒ホに傳へ〳〵桎梏傳の禁も釋る天の冥福よ心ある下司も
みな只顧感嘆するこのとき死ぬも劇齋ハ只平伏てをり〳〵ハ藤綱これを信と
なく好賊劇齋頭を擡よ汝ハ心薄くも偽二郎を陷れ剰このとき来隨從
せし〳〵旦藏を誣て殺さんと謀り〳〵その殘忍甚しく蜜ハ分まうせし如く
姦夫る恨こゝよりて偽二郎を謀り〳〵と問れてやゝ久く頭を擡憲断の炯
然あり密謀あらはれてやゝ罪を脱さんとすれども偽二郎が密通の證据
分明る柔が自筆の詠草ハ礫が護符囊あり故ハ礫を教
戒をうる慈悲ハあるくゝ仇とあり彼妾ハ自殺せり亦共伯ハ走らず

しを恨る偽二郎が所為なんと抗べども訴ありて是非を憲断よるとなへ
外聞を脱まゝ〳〵謀りてことと云云ハ巧者しハ怒りやとべくも
わゞ。これ入りてと飾を藤綱冷笑ひ證据のなる蹟ハ何処よあるとゝく
えもとのことがせば劇齋ハ懷中る畳紙を掻拐りて廻れでゆと回報てやゞて
さ〳〵知を五十子七郎ゝ取てゝ投きつ恭〳〵左のゝとり進れが藤綱
案よるものせてこハ偽二郎が自筆ハせるの期ハ及びて偽り飾るを医生が
あゞとこよれいあゝとやゝ決汝ハ西国より帰京の翌朝偽二郎が送れる揚枝
歯磨よりて姦夫あるを察しその陵下女の匙を威して礫が奸夫ハ偽二郎
ありと定るこれを知るを匙ハ逼りて偽二郎が礫ハ贈り〳〵詩哥を初て

竊見るやうんとの折髢を劫引却く鴨河よ突落し還く髢ハ逐電せ
しそ。その母異杜を召よせく。時日を限る邪怪の催促ぶ。ひとしよあがそ
の残毒をもて推せば礫とも汝が竊ふ殺しく井よ沈めよ疑ひ晴かくもあくびと
爭もぶ水火の責もといふべしいかと明よその祈膳をそなぐくいひ當られて劇斎ハ
唯ことなりよかへしぬ。肚裏よあるこの人四聰八達の才識ありと世よふハ現き言ふ
あくぶりう髢と礫とを殺せずハ蜜ハなもうあくぬよりふく知られんあるれども
死人よ言ひくとハ推量をといふれる偶中まあんぜうん脱ぐくハ脱れぎあらと思ひ
ふく胃推鎮め所疑でいひども小人のぞう礫を殺えん況髢を鴨河へ推沈ぜべ
恨あるめく誤やうん身よとりえハいぶぶとのいせも果ぶ礫と疾視不敵の辯者あり

偽る欺戌羽十郎彼ものどもをとくく呂べと下知をれば用意をあるりけん中ハのかたり
まぶ既よ牽よ置ふ髢が帯よ縄を加へ一個の獄卒これを牽立その母異杜ぶ
左右の腕を歩卒両人金押へく簀子の下よ並居れば劇斎いよく胆を冷して魂も
身よ添ぶ慌忙めくいぶども立んとぶを藤綱ハ制めくえくて彼傳めふと
声をかれば五十子七郎横臑拂く簀子の下へ筋斗しつ地響ぶ表ぜ降ぜば
戌羽十郎衝と寄せく忽地素を被てうり藤綱再び佶と疾視劇斎かくも
偽飾あれ上洛のそ下ありり長時朝臣の密意よより汝ぶ訴の趣を勘察と
偽りあんうをもれり。あるて五十子戌羽の両老黨を汝が近郷よ遣しつ。
彼礫が保人ハ杣木挽坊ぶ異杜ハ且その異杜ハ汝が家の炊妾髢ぶ母ぇと

清十郎
蜜八
偽助
藤中

清十郎
劇蔵
星蔵

正しく探り出つるまゝ。聽く異杜を召よせて。密〳〵に糾明あらゝ〳〵。礫が素性も定ふ知れぬ。且是は汝を欺威られて鴨河へ沈〳〵ども幸ひて死ぬべきとゝ。ありて是を召捕せて汝が多丸伎倆にて偽三郎礫が姦通のゝの趣文をあれりとゞ。つゞ〳〵のあらも及ぶぞ異杜件の顛末を劇齋に說あらせよといふとく異杜を慷慨し丸頭を擡く小膝を進め喃名草ぬしある九月望の日の黄昏に吾倆へ聊所要ありて四條ゝ〳〵人多丸〳〵ゝ鴨河原を過る程に打〳〵入水の多丸。近丸岸辺に流れ著丸助そゝよ人〳〵と叫ぶ女子の声〳〵聞ありゝ〳〵捨ゝ丸を走り下りゝ辛〳〵引揚てゝ見れば。ゝ〳〵ゝ女児の是を胸を潰れて情由も問ぞ水を吐つ。衣裳を絞りつ。勤ゝ幸ひて恙なれば。

扶て宿所へ抱くかへりとの夜すの起と問へども悪〳〵ゝ宜ふいなぞ或へ叱り或へ賺〳〵ゝ。是身が旅の留守の程阿礫が密夫を引入る為体竟ゝのゝ覚て是が難義に及び〳〵ゝ。その折是身ハ是を威して彼密夫が寄宿る寺あで案内を致せとて。俱して竊に宿所を立出鴨河の假橋より情なくもゝが女児を突落し多丸ゝすの趣を語ゝ是が阿礫と熟あて密夫のゝもあく是身ゝ吉〳〵ゝ誓べ丸すまあ〳〵ねどゝ小女の寸覚ゝとゝゝ料簡のあるべ丸。さるを欺丸誘出して殺んとあゞ謀られハ鬼ゝ等し丸御主人ゝゝと思べいぞ恨〳〵く腹〳〵ゝ丸と限りあれど再び是を案ぶるゝ阿礫が保人ハ吾倆へ是も亦渠が為ゝ根密夫の提撕あるゝの罪ゝとゞ〳〵ゝ。ゝゝを只管鴨河へ突落されゝをいひ

立て官府沙汰に及ぶとも勝を取るとかくんもを吹疵を求んより且く渠を
隠し置き時宜によりてともかくも又せんまでのあらぶにやとおもひへして落やうに
矢背に相識る紫責許憑えて影を遣しつ身に入る渠が往方の絶て
あるべきと偽りて勧解つも日を過ぎ程に阿磔は夜深に井に落て死ぬると
告られしとて原来彼事発覚れて脱す路のあるまに自殺をん痛しとも
あへいに影獲くてその柩をえ送らで病に假托疎遠しく又いくばくの
日を送れば恐ひがけなくこの殿ごこの問注所へ召よせられ彼條の一五一十を問せ給ふ
脱れくて遂なくやあげーこは哀しや矢背へ遣せー影さへ召捕られて場
所を牽れぬるそも人のあと入るのいと恨とおもひ可愛とおもひ見ずとおもひけて目を

拭へば奸智に長る劇奇も竟に偽の路絶て今はかうと思ひけん観念の眼を
閉じて浅羽十郎ようち對ひ小人一時の愆ゆえ人を損ひ身を戒め後悔ある
べきー嚮はあやまりしー如く恩愛正妻に異ある所ー側室を寵れ恨ある
ー根小人年来廣言しよりも人を欺くとも人を欺くとも欺くといひつるこの奸
奸夫淫婦の罪悪を明く地に正さとて第一番に小人が世の胡慮にあらぬ
べーまた又這奴小を欺く徒ーこの憤りを釋んとやとおもひけれども
告る悪を鴨河に推沈つ渠が口より漏さとて後業汗藥にて磔を
碎しと夜竊に遂る車井に投入るつ更に奸夫偽二郎を陥とんと計りつ
蜜八薬中ホがおーせー如ーあれども件のやうに女子どもを害せまい腹心ある

蜜八よせうあるべし。こゝ尉の殿の藤綱聰明なるもあくも異杜母子を捕へくるゞ
密策をもつゝあるべし。鬼神不測の案驗とおもうさんもかこうるべし。死せりと思ひ
見ハ生て渠より事の顕れぬるべ誰を恨んよりも非。おのれ自ら首伏をうける藤綱これをうちまて劇齋が首伏甚遅し汝ハみづから賢とし
悞を飾るの故を羞を厭ふく罪をなうり人を悞をあらくと身を縛の索を被と
羞められ大かん且医ハ仁術なるものゝ不仁をすとして人を害さんと謀りしハ
抑何のおろかぞ又汝が吾番なる長旅の留守の宿を女子たりよ任せしゝ彼ハ
奸夫を引入れて忽地家を倒せよ至れり言葉巧よ非を飾りて衆人を欺たり
とも日月と共よ限なく暗を照しなる官府を欺ぬんや嗚呼の白物なと

叱懲して又つゝくとなきこつもれ偽二郎と呼くれが獄卒間近く牽きうり
當下藤綱ハ劇齋が進せし詩歌を再び讀くこれハ汝がなる跡弥と問へば
御諚の如しと答へ藤綱笑くうんよかませし趣甚違へり汝ハ墓を發ぐ
とも外よ盗し物ハ如何と嚮よ訊しと紀盗せしやとより旅せし人の
宿を窺ひ闕隙を鑽くその妻妾と密通し豆暮よ人の飯を食ひ豆
暮よ人の酒を喫こ人の臥房をうゞ臥房として遊蔵ること三ヶ月これを盗
賊といふべし汝ハ人の側室を竊こ又人の酒食を盗こその居宅を竊こ
ちうしハ一朝の賊よあらべその罪墓を發しと絶く軽重なるものゝ無慈の
癖者なと懲せば偽二郎ハ理よ伏して返ハ辞ハありけり早く頭を擡密通の

る露顕のうへいとでもて罪の大あるを恥りさぶれ小人は彼女子と宿縁あり。七年ばかり前つ冬小人鎌倉よ旅寝せ〜穿云云のる有く鐵の観音堂内に枕を並べる女子は件の阿磔とかそいの日七月十日阿磔が蓮華院よ詣〜折それとへあくで春恋〜より千さよ心を砕おく本意を遂く昔を語まば舊縁〜を再びそこよ結びこあ天縁とやひ必つもろうく渠よ曲々れ七月の中幹より九月の中幹まで君草が宿所よ潜びてそりあ下が帰京の信よ数鳥が勝て又故の寺へ入り去〜後は鳳の翅も絶果て冥土の鳥と成る者ぞよ情婦の送葬外ぬ空けど心の哀を知るもあるよ夜深よ出くその墳よ立ぬり〜ば忽地ぞの変よ依落く衣裳よ黏〜壊さよ彼劇齋が

説計を資〜はれがるいも怪くぶと唧ぶく陳むれば藤綱ぶて声高ぶ。愚かるが偽二郎縦舊縁あれいどそ人の妻妾と奸通〜そそはいとこれよあるべきやこの待歌は亦何の為よ磔よ贈與るこれは汝が詠草歟待とは又歌とのひあろ汝〜が詠ざあり故をあくめりぶぞと問れて竟よ慙るぶ。初小人遵華院よ寄宿せ〜ば向後の吉凶ぶりかぶ観音籤を拈ぶ〜よ。即第三籤を始りとは彼籤の待句ぶく愚詠ぶ。その内簡様くれ小ぶり阿磔と邂逅せ〜折よ彼籤の句を案ぶ〜ば蔵衣云云の氣轉の二句時に取てよく當れり又臨水不可濯遭砥初究研と示されは水も漏さ心と堅れ妹使の契りを結ぶ兒前象かんとぶ〜ぶと憑〜くぶ兒又その和歌は初小人

鎌倉なる鐵の観音堂に図らず阿磔を挑こし夜腰刀を附うし山鶏の
靴脱て渠が懐に落通り又渠ハ渦水の芽を踏り落しつ。そ小人がもま入ぬ。
駿の年ちく彼再會せ夕あまてつのす皆四合しく情愛ひく浅りく阿磔
今茲あ心件の靴を失ひ紙に捻りく秘蔵せ。その紙に虫糞掛りく一首の
歌と続きとう小人ホ歌のあらを定なるびねざれども歌ハ素盞雄尊の八雲
立出雲八重垣にまりあれば夫婦にあるべ祥にてそと思へば憑しくのひ。
あるじが帰京の報知に驚ち猛に別去んとせしと彼虫糞の歌ハ滅く舊の
白紙にありしかば阿磔ハ怪に疑ひく放遣るに忍び難に誓紙を求めれば
小人渠を慰めく彼靴の包紙に云云の詩歌を写しつ誓紙に代く取らせ。

又別を乞せ前夜に小人奇なる夢をみとう驚が磔と小人と鐵観音堂に臥すに。
首観音の頭顱忽地に俗髪にありあるべ面影小人に似るやうくかくてその仏の頭顱ハ
北のつくに軀に續て全體具足に拜れ。と思へば又忽地に散碎く水となり。
流れて跡なくなりぬ。いとも怪しき夢なれども夫婦ハ一體分身に軀にあれし仏の
頭顱小人に肖させ。全身具足とうえさせ。ハ阿磔と飽に別を惜ども程
く相合ひて夫婦とあるべき祥なんその水になりて失ぬ。ハ今の煩悩を流して
歓びを迎る祥ぞと彼に占ひ。れも占ひて憑しくのひ。みか空なるべ思へれば
籤も善夢も人迷ハ。のあとりと暁れば悔しくのとべ藤綱ぞ笑ひ惑へる
うか惑へうか耶とあるべ白徒ぞ。解示さんハ無益なるとも色に好に利に躭る

世の為許人が蔵の為中しもなれりと云へば聊論云劇斎はいまだ知らざるを。
汝が一旦惑溺せし磔が素性を尋ねば廼汝が兄とうやえし嶋影屋湯治が後妻
水石といひし淫婦なり件の水石は鎌倉の破落戸佐栗衣平が女児なりしを湯治が
借財の代として理なくこれを娶りしかば蘆頭吉と云へる無頼漢は水石が密夫なるを
より一夕竊に誘引ぎて走るといくばくなく鐵観音堂の辺まで追隊なるの
どもを追詰られ蘆頭吉は傷られて訟の庭に牽れて偽二郎が
罔らを水石を犯せしもとの宵のうでであんぞんとらんを劇斎駭然る眉を
顰めて嗟嘆し原来阿磔はそが兄の離別せし妻なりしを知らざりか。
羞じて回答をせざりしを藤綱はさもことと又偽二郎ほうも對ひ汝ほうもいまだ

この薬中は當初鎌倉を追放せられ水石が密夫蘆頭吉に涙その面を撲傷
られて人事不省の交参なりしを彼此を流浪して近比都に赴き蓮華院の守護
生道人となりしるうなれば狀を故ぶ讃佛場にて夜叉を調戯れつ。
でも醜き顔の瘡毒にあり形のごとく鬼畜に等しくなりしこの薬中は鎌倉
中に辛しく竊出せし水石を偽二郎に犯されて且彼磔は水石ありしを夢にも
知らざりしと劇斎が悪ずるに與しその墓を發掘は水石が罪障重なるより死
後とて人ども天罰を免れ故の密夫の衣を剥れその尸を曝れは抑今いくばく日で恥
亦これあり大なるか磔が水石なりしかは異杜は問究その実を始めて又いかなる日か
薬中を捕捕して熟視れば彼蘆頭吉はよく似るよりて素生を責問せしに

かゝる所果して違ひぬ汝ホかくとあらうやと問ふて偽二郎藥中ハも驚ろくん
くりて齊一嘆息をなりる藤綱るこの善悪応報因果覿面の理りハ又これわをよ
わゝぐりけをもどの水右ハ蘆頭吉と恋情を情を遂げ一旦湯治よ要られて又
蘆頭吉と走りるその夜偽二郎よ犯されつ遂よ妓院よ身を售れて萬客と枕を
共ゝ妓院を去てもいぬも故の夫湯治ゞ弟劇齋ゞ側室ホりて又偽二郎と密通し
事顕れて劇齋ゞ奸計よ命を隕し死後ゆゑ又蘆頭吉の藥中ホよ墓を發れ
發覚しめの脱ぬ劇齋蜜ハ匙ホあゞ共ゝの獄舍よ繋れる差をかゝ
同悪同罪汝よ出く汝よ返る業因とあゝぐるや福も基あり禍も胎あり
原是湯治ゞ残忍ある貪りく飽くとなく利慾の為よ恩義を忘れて

妻の浴當ゞ瞽女ある頻よ浴くとなく強姦をなて氣殺せし
業よりその富浮る雲のごくその身一期を有ざりしと世の風声よ聞くて劇齋ハ
その弟とて前車の覆るを警ゞ勉よ書を讀れば却その奸智を肥して權
欺毒悪人を殺し遂よ身を殺をよ至れり從萬卷の書を讀こうとも道を知ら
ざれゞその行狀愚直ある俗客よ及ざるを多くり就中偽二郎ハ佛を極て情慾を
恣ままし初ハ水石を共浴して鐵觀音堂を穢せども冥罰をかゝれゞ近くハ
蓮華院ある觀音堂ホて人の妻妾を眷恋し変詐百端種々の奸智をめぐらして
又情慾を遂れども佛の慈悲ハ無量ホてその愚悪を哀憐し初ホハ詩を以て
諭しゝども曉らゞよりて又和奇をもて喩しゝども曉らゞよりて又夢ホ入りて

いとく戒めるあるべしまもく迷ひて吉祥とおもひ汝もまづ観音籤を籤衣又
莫復深著欲相縁といひ〜鎌倉ゆく炎涼せ〜水石と悪縁を結べを。
制せあるべし又臨水不可濯遺砥初究研とい水石の礫い劇斎よ井よ
落されく死せるをいふ。あるいどもこの怨を雪るとかあるべ〜〜どよりて濯ぐべ
くべをいふ砥よあるの砥へ則られく青砥よあるて究研と衆悪瓦礫の辛る
ど。如く各密支を研顕られく等く罪よ伏はすし又虫糞の歌とよ山鶏の
愚なりるをきみりれ潤るきあるよ水がきしてとい張華が博物志まいへること
あり山鶏いあづ毛色の美れを愛るめ。さるとも終日水よ映して去らず目眩れ枝
より落く躯て溺死せるとも汝ホも亦是の如し色の為よ身を忘れて後の禍をとどめ

97716